

# 「学而篇」の訓法の変遷について（一）

石 川 洋 子

## 一、はじめに

この論文では、最も読まれたであらう漢籍、『論語』十卷二十篇の巻頭を飾る「学而第一」の訓法の変遷を比較検討し、訓読の発展と日本語に対しての影響を考察する。資料は、中世から近世までの代表的な十二種を使用する。

## 二、資料について

資料は以下の十二種である。各資料にはアラビア数字で資料番号を頭書し、次に略称を記す。これらは、概ね年代順に並べてある。つまり、中世の資料は資料番号1から4であり、近世の資料は資料番号5から12である。ただし、資料番号5は近世に刊行されたものであるが、清原家の点本であるため近世の資料の筆頭に挙げた。

「学而篇」の訓法の変遷について（一）

- 1、元応本 『論語集解』(複製本) 元応二(一三二〇)年 蓬左文庫藏 『元應鈔論語集解攷文』に拠る。  
昭和三十三年十二月 經學研究会
- 2、建武本 『論語集解』(複製本) 建武四(一三三七)年 清原頼元点(卷一〜六)、康永元(一三四二)年 清原良兼点(卷七〜卷十) 大東急記念文庫藏。
- 3、成算堂本 『論語集解』(複製本) 文明七(一四七五)年以前成立。『論語抄』△成算堂叢書 大正六年五月△に拠る。
- 4、元龜本 『論語集注』(零本存卷二) 元龜四(一五七三)年 筑波大学附属図書館藏 (『筑波大学和漢貴重図書目録稿』に拠る請求番号「ロ860-28」)
- 5、清家点 『論語集解』 嘉永元(一八四八)年跋刊 東京大学総合図書館藏
- 6、道春点 『四書集注』 寛文四(一六六四)年刊 内閣文庫・国立公文書館藏
- 7、春臺点 『論語古訓正文』 宝暦四(一七五四)年刊 立正大学図書館藏
- 8、後藤点 a 『改正四書集注』 寛政六(一七九四)年刊 東洋大学図書館藏
- 9、後藤点 b 『嘉永新刻 論語 後藤點 片假名附 完』 嘉永元(一八四八)年刊 架藏
- 10、一斎点 a 『四書集注』 文政八(一八二五)年刊 東京大学総合図書館藏
- 11、一斎点 b 『四書集注』 安政二(一八五五)年刊 東京大学総合図書館藏
- 12、鈴木点 『論語參解』 文政三(一八二〇)年刊 (『大學參解 論語參解』△鈴木胤著作集(經學篇)△に

扱(る)。

### 三、「学而篇」の訓読の変遷

漢文を日本語として訓み下してゆく場合の訓読をどのやうに分析・分類したらよいかといふことは常に迷ふところである。漢文訓読は日本語の問題であると同時に、当然の事ながら漢文の語法と深い関わりを持ち、それらが複雑に絡み合っているからである。今回は試みとして次のやうに分類する。

先ず、(一)として、『論語』の本文(以下「原漢文」と呼ぶ)にある漢字を、資料によりどう工夫・処理してあるかといふ訓読の変遷、(二)として、より日本語らしく訓むために追加される形式名詞「コト」や助詞「カナ」や助動詞「ジ」や「ム」などの補読語の変遷、の二つに大きく分類する。

(一)は、次のやうに下位分類する。第一に、原漢文の区切りをどこにするかといふ句読点の問題である。これをAとする。原漢文の句読点の付け方により意味が異なってくることもある。漢文訓読においては、それが返り点・句読点の上に現はれる。原漢文の句読点をどのやうに認識し、読み下してゐるか資料により相違する用例を挙げる。第二に、原漢文にある漢字に対して、どのやうな「送り仮名」(「振り仮名」 $\wedge$ ルビ $\vee$ )も含む)を付けてゐるか、あるいは「不読」であるかといふことについて検討する。第二の分類をBとする。これをさらに下位分類すると、以下の通りである。a、原漢文の同一用例で、資料により「訓読み」と「音読み」との相違のあるもの。b、原漢

文の同一用例で、資料により「訓読み」が二種類以上あるもの。c、原漢文の同一用例で「音読み」のもの。d、原漢文の助字（いわゆる日本の訓読で言ふ「置字」を含むものである）の資料による、読・不読。

(二)は、次のやうに下位分類する。第一に、語彙である。これをAとする。これをさらに下位分類すると次の通りである。a、形容名詞。b、助動詞。c、助詞。d、その他。第二に、文法である。これをBとする。これをさらに下位分類すると次の通りである。a、ク語法。b、条件法。c、待遇表現。d、活用。

先づ、以下の用例の凡例を示す。

○『論語』の原漢文は、金谷治訳注『論語』（岩波文庫本）に拠る。

○「学而第一」は全部で十六章ある。用例における括弧内のアラビア数字はその章数である。

○△ √の中は書き下し文である。この書き下し文は、資料名を明示しない場合は、資料そのままではない。分かり易くするため仮名字体や、仮名を漢字にするなど、表記を改めたところがある。

○後藤点・一斎点はそれぞれa、b二種類づつ資料を使用した。a、bと断はらない場合は、それぞれの二種類の資料が同一の訓法であることを示す。

次に、資料による原文の異同を示す。

①「爲人也孝弟而好犯上者鮮矣」、「孝弟也者其爲仁之本與」（2章）、「出則弟」（6章）

「弟」字が元応本・建武本・成簀堂本・清家点は「悌」字である。

② 「孝弟也者其爲仁之本與」(2章)

「爲」字が元応本・成簀堂本・清家点には無い。

③ 「巧言令色鮮矣仁」(3章)

春臺点は「矣」字が「有」になってゐる。また、建武本は「矣」字が無い。

④ 「與朋友交言而不信乎」(4章)

元龜本・道春点・後藤点・一斎点・鈴木点は「言」字が無い。

⑤ 「道千乘之國」(5章)

元応本・成簀堂本・清家点は「道」字ではなく、「導」字である。

⑥ 「夫子之求之也其諸異乎人之求之與」

元応本・清家点は二番目の「之」字が無い。また、清家点は三番目の「之」字も無い。

⑦ 「可謂好學也已矣」(14章)

元龜本・道春点・春臺点・後藤点・一斎点・鈴木点は「矣」字が無い。

⑧ 「未若貧而樂道」(15章)

元龜本・道春点・後藤点・一斎点・鈴木点は「道」字が無い。

⑨ 「始可與言詩已矣」(15章)

成簣堂本は「已矣」字が、「也矣」とある。

⑩「告諸往而知來者也」（15章）

元龜本・道春点・後藤点・一斎点・鈴木点は「也」字が無い。

⑪「不患人之不知」（16章）

春臺点は、右の原漢文の最後に「也」字が有る。

⑫「患己不知人也」（16章）

元龜本・道春点・後藤点・一斎点・鈴木点は「己」字が無い。

（一）原漢文にある漢字に対する訓読の變遷について

A 返り点・句読点

①「有朋自遠方來」（1章）

中世の資料と清家点・道春点では右の原漢文を「有朋自遠方來。△朋遠方ヨリ來タルコト有り。▽」と一文に訓む。清家点・道春点以外の近世の資料では「有朋。自遠方來。△朋有り。遠方ヨリ來タル。▽」と二文に訓む。一文に訓む方が古い読み方である。

②「傳不習乎」（4章）

元龜本を除く中世の資料・清家点では右の原漢文を「傳不習乎。△習ラハザルヲ傳ヘンヤ。▽、春臺点・鈴木点は△習ハザルヲ傳ルカ。▽と訓む。元龜本と後藤点・一斎点・鈴木点では「傳不習乎。△傳ヘテ習ハザルカ▽」と訓む。これは古注と新注の相違に基づく訓読の相違である。前者は「よく復習もせずに、人に教へたのではないか。」と言ふ解釈であり、後者は「伝へられたことを、復讐もせずにみるか」と言ふ解釈である。

③「節用而愛人使民以時」(5章)

資料番号1の中世の資料から資料番号7の春臺点までは、右の原漢文の訓読を△愛ス。▽で句点とし、二文に訓む。近世後期の資料後藤点・一斎点・鈴木点は△愛シ、▽で読点とし、一文に訓む。

④「賢賢易色事父母能竭其力事君能致其身與朋友交言而有信雖曰未學吾必謂之學矣」(7章)

中世の資料・清家点では、右の原漢文を「賢賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友交言而有信雖曰未學吾必謂之學矣。」と区切り、その訓読を△易ヘヨ。▽、△竭ス・竭セ。▽、△致ス・ユタネヨ。▽、△謂ハン。▽で句点とし、四文に訓む。道春点は△易ヘヨ。▽、△謂ハン。▽で句点とし二文に訓む。春臺点・後藤点・一斎点・鈴木点では、△易ヘ、▽、△竭シ、▽、△致シ、▽で読点とし、一文に訓む。但し、鈴木点は「易」を「アナトリ」と訓む。

⑤「主忠信無友不如己者」(8章)

元龜本・春臺点は△主トセヨ。▽と句点で二文として訓む。この二種以外の資料は△主トシテ・主トシ、▽と読点とし、一文に訓む。

⑥ 「愼終追遠民德歸厚矣」（9章）

春臺点と一齋点は△追フ。▽で句点として二文に訓む。この二種以外の資料は△追フトキンハ・追フトキハ・追ヘハ▽と条件文とし、一文に訓む。

⑦ 「夫子至於是邦也必聞其政」（10章）

中世の資料・清家点・道春点・鈴木点では、右の原漢文を△至ルトキニ・至ルトキハ、▽で読点とし、一文に訓む。一齋点も△至ルヤ▽として一文に訓む。春臺点・後藤点は△至ル。▽で句点とし、二文に訓む。

⑧ 「夫子温良恭儉讓以得之」（10章）

この用例は十二種の資料の中で、鈴木点のみが相違してゐるものである。鈴木点は「夫子温良恭儉、讓以得之。△夫子ハ、温良恭儉ニシテ、讓テ以テ之ヲ得▽」と訓む。鈴木点以外の資料は「夫子温良恭儉讓、以得之。△夫子ハ、温良恭儉讓、以て之ヲ得タリ▽」と訓む。読点を打つところが「讓」字の前か後かにより解釈が大きく異なる。

⑨ 「父在觀其志父没觀其行」（11章）

元龜本を除く中世の資料・清家点は前の「觀」字を△ミル。▽と句点とし二文に訓む。元龜本・近世の資料は△ミ、▽と読点とし一文に訓む。

⑩ 「禮之用和爲尊」（12章）

中世の資料・清家点・道春点・後藤点では「禮之用、和爲尊。△禮ノ用ハ、和ヲ尊シト爲。▽」と訓む。春臺点・



鈴木点は「禮之用和爲尊。△禮ノ和ヲ用テ尊シト爲。▽」と訓む。この用例も原漢文の区切りと、「用」字の訓み方の相違で解釈が異なるものである。

⑩「先王之道斯爲美小大由之有所不行知和而和不以禮節之亦不可行也」(12章)

右の原漢文は⑩に続くものである。「小大由之」が上句に付けて解釈するか、下句に付けて解釈するかで意味が異なってくる。

元龜本を除く中世の資料・清家点は「先王之道斯爲美。小大由之、有所不行。知和而和、不以禮節之、亦不可行也。」と区切り、「小大由之」を下句に付けて解釈する。元龜本・道春点・春臺点・後藤点は「先王之道斯爲美。小大由之。」と区切り、「小大由之」は上句に付けて解釈する。一斎点b・鈴木点は「先王之道斯爲美、小大由之。有所不行。知和而和、不以禮節之亦不可行也。」と、△美ト爲シ・美トシテ▽と訓み、「小大由之」を上句に付けて解釈することを明確にしてゐる。また、春臺点・一斎点は「有所不行。知和而和、不以禮節之、亦不可行也。」と△アリ▽で句点とする。他の資料は下に続けて一文とする。

⑫「信近於義言可復也」(13章)

中世の資料・清家点・春臺点・一斎点は△近フセヨ・近シ・近ツク。▽と句点とし、二文に訓む。道春点・後藤点・鈴木点は△近トキハ・近ツケハ、▽と読点とし一文に訓む。

⑬「恭近於禮遠恥辱也」(13章)

⑭と同じ。

⑭「就有道而正焉」(14章)

中世の資料では建武本・成算堂本・元龜本、近世の資料では春臺点・一斎点・鈴木点は△正ス。▽と句点としてゐる。元応本・清家点・道春点・後藤点は△正スヲ、▽と読点とし、下に続けて一文に訓む。

⑮「未若貧而樂道富而好禮者」(15章)

元龜本を除く中世の資料・清家点・道春点・後藤点は「未<sub>レ</sub>若。貧而樂(レ)道。富而好<sub>レ</sub>禮者。△未<sub>レ</sub>タ若シ。貧シウシテ(道ヲ)樂シミ、富ンテ禮ヲ好ム者ニハ。▽と二文に訓む。元龜本・春臺点・一斎点では「未<sub>レ</sub>若貧而樂(レ)道。富而好<sub>レ</sub>禮者。△未<sub>レ</sub>タ貧シフシテ(道ヲ)樂シミ、富ンテ禮ヲ好ム者ニハ若カズ。▽と一文に訓む。

⑯「不患人之不己知」(16章)

中世の資料である元応本・清家点は「不<sub>レ</sub>患。人之不<sub>レ</sub>己知。△患ヘサレ。人ノ己ヲ知ラサルコトヲ。▽と二文に訓む。右記以外の中世の資料と近世の資料は「不<sub>レ</sub>患<sub>レ</sub>人之不己知。△人ノ己ヲ知ラサルコトヲ患ヘス。▽と一文に訓む。

⑰「患己不知人也」(16章)

中世の資料である元応本・清家点は「患。己不知<sub>レ</sub>人也。△患ヘヨ。己カ人ヲ知ラサルコトヲ。▽と二文に訓む。右記以外の中世の資料と近世の資料は「患(己)不知<sub>レ</sub>人也。△(己カ)人ヲ知ラサルヲ患レフ。▽と一文に訓む。

以上が、資料により返り点・句読点の相違のある用例である。古注と新注との相違のために訓読が相違する用例は割合に少なく、各加点者個人の説の相違のために訓読が相違する用例が多い。また、中世の資料は近世の資料より一文を短く区切って訓む用例が多い。

B 送り仮名（振り仮名）（ルビ）を含む）について

a 資料により「音読み」と「訓読み」の両方ある用例

① 「巧言令色」（3章）

元龜本を除く中世の資料・清家点は「巧言令色（コトヲタクミニシイロヲヨクスルハ）」と訓読みであり、また、同じ訓読みでも元龜本・道春点・一斎点は「コトヲヨクシイロヲヨクスルハ」と訓む。春臺点・後藤点・鈴木点は「巧言令色（コウゲンレイシヨク）と音読みである。一斎点が音読みでないのは一斎点を考察する上で重要である。

② 「遠耻辱也」（13章）

中世の資料では、「恥辱」の二字を「ハチハチ」と一字一字訓読みし、清家点は二字を「ハチ」と訓読みする。近世の資料は「チヂョク」と音読みである。

③ 「生」（「君子務本而立而道生」（2章））

中世の資料・清家点・道春点は「ナル」と訓読みする。春臺点・後藤点・一斎点・鈴木点は「シャウス」と音読

みである。

④「敬」〔「事敬而信」(5章)〕

中世の資料・清家点は「ツ、シンテ」と訓読みする。清家点以外の近世の資料すべては「ケイシテ」と音読みする。

⑤「行」〔「行有餘力」(6章)〕

後藤点は「ヲコナツテ」と訓読みしてゐるが、それ以外の資料は「カウ」と音読みである。

⑥「行」〔「父没觀其行」(11章)〕

中世の資料・道春点・後藤点では「カウヲ」と音読みしてゐる。道春点の左訓は「ヲコナヒヲ」と訓読みしてゐる。春臺点・一齋点・鈴木点は不明である。

⑦「賢」〔「賢賢易色」(7章)〕

中世の資料・清家点は「賢キヨリ賢カラントナラバ」と「賢」字を「カシコシ」または「サカシ」と訓読みする。元龜本の右訓と近世すべての資料は「賢ヲ賢トシテ」と「賢」字を音読とする。

⑧「歸」〔「民徳歸厚矣」(9章)〕

中世の資料・近世の資料は「キス」と音読みする。清家点は「ヨル」と訓む。道春点の左訓は「ヲモムク」と訓む。

⑨「美」〔「斯爲美」(12章)〕

中世の資料・清家点・道春点は「ヨシ」と訓読みする。元亀本の右訓・後藤点は「ビ」と音読みする。春臺点・一斎点・鈴木点は不明である。

⑩「復」〔「信近於義言可復也」(13章)〕

元応本・建武本の左訓・清家点・春臺点・一斎点は「フクス」と音読みである。建武本の右訓・成實堂本は「カエツサフス」、元亀本は「シタカフ」、道春点・後藤点・鈴木点は「フム」と訓読みである。

⑪「因」〔「因不失其親」(13章)〕

元亀本を除く中世の資料・清家点・春臺点・鈴木点は、「イン」と音読みする。元亀本・後藤点・一斎点は「ヨル」と音読みする。

⑫「失」〔「因不失其親」(13章)〕

元応本・成實堂本・清家点は「シツス」と音読みする。建武本・元亀本・清家本の左訓・近世の資料すべては「ウシナフ」と訓読みする。

⑬「敏」〔「敏於事而」(14章)〕

春臺点は「敏ニシテ」と音読みする。その他の資料は「トクシテ」と訓読みである。鈴木点は不明である。

以上が、資料により音読み・訓読みの両方ある用例である。中世の資料・清家点では音読みよりも訓読みするところが多い。道春点は音読みすることもあるが訓読みする場合が多い。春臺点・後藤点・一斎点・鈴木点は音読みす

ることが多い。但し、⑤⑥の「行」字は、時代を通じて「カフ」と音読みすることが多い。

b 資料により「訓読み」が二種以上ある用例

①「時」〔學而時習之不亦說乎〕(一章)

元龜本・建武本・成實堂本・元龜本・清家点・春臺点・後藤点・一斎点は「トキニ」と訓む。道春点の左訓は「トキトシテ」、右訓は「ヨリヨリ」と訓む。鈴木点は「時ヲ以テ」と訓む。

②「習」〔學而時習之不亦說乎〕(一章)

中世の資料・清家点・道春点の左訓・春臺点・後藤点・鈴木点は「ナラフ」と訓む。道春点の右訓・一斎点は「ナラハス」と訓む。道春点の右訓は「カサヌ」と訓む。

③「説」〔學而時習之不亦說乎〕(一章)

中世の資料全部・清家点・道春点・後藤点は「ヨロコハシ」と訓む。春臺点・一斎点は「ヨロコブ」と訓む。鈴木点は「オムカシ」と訓む。

④「樂」〔有朋自遠方來不亦樂乎〕(一章)

元龜本を除いた中世の資料・清家点・道春点・後藤点は「タノシ」と訓む。元龜本・春臺点・一斎点は「タノシム」と訓む。

⑤「慍」〔人不知而不慍不亦君子乎〕(一章)

中世の資料・清家点は「イカル」と訓む。道春点の右訓・鈴木点は「イキドホル」と訓む。道春点の左訓・後藤点は「フツクム」と訓む。一斎点は「慍セ」とあり、音読みと思はれる。

⑥ 「作」〔好作亂者未之有也〕（2章）

元龜本・元龜本・清家点・道春点は「ヲコス」と訓む。建武本・成篁堂本は「ヲカス」と訓む。後藤点は「ナス」と訓む。清家本の左訓・春臺点・鈴木点は不明である。

⑦ 「爲」〔孝弟也者其爲仁之本與〕（2章）

元龜本・道春点の右訓は「ヲコナフ」と訓む。道春点の左訓・近世の資料はすべて「ス」と訓む。

⑧ 「日」〔吾日三省吾身〕（4章）

中世の資料・清家点の左訓・道春点・後藤点は「ヒビニ」と訓む。清家点の右訓は「ヒニ」と訓む。春臺点・一斎点・鈴木点は不明である。

⑨ 「三」〔吾日三省吾身〕（4章）

中世の資料・清家点・春臺点・鈴木点は「ミタビ」と訓む。道春点は「ミツナカラ」と訓む。元龜本の右訓・後藤点・一斎点は「ミツ」と訓む。

⑩ 「道」〔道千乗之國〕（5章）

中世の資料・清家点の左訓は「ミチヒク」と訓む。建武本の左訓・元龜本の左訓・清家点の右訓・道春点以後の近世の資料は「ヲサム」と訓む。これは古注と新注の解釈の相違によるものである。

⑪ 「人」〔節用而愛人〕(5章)

建武本・成實堂本・道春点・後藤点は「ヒト」と訓む。元応本のみ「タミ」と訓む。春臺点・一齋点・鈴木点は不明である。

⑫ 「親」〔汎愛衆而親仁〕(6章)

元龜本以外の中世の資料・清家点は「シタシンス」と訓む。元龜本・道春点・後藤点・一齋点は「チカツク」と訓む。清家点の右訓・春臺点・鈴木点は「シタシム」と訓む。

⑬ 「事」〔事父母能竭其力事君能致其身〕(7章)

元龜本以外の中世の資料・清家点・道春点は「ツカフマツルニ」と訓む。元龜本・一齋点・鈴木点は「ツカヘテ」と訓む。後藤点は「ツカフマツテ」と訓む。

⑭ 「致」〔事君能致其身〕(7章)

元龜本のみ「ユタヌ」と訓む。元龜本を除く中世の資料・近世の資料は「イタス」と訓む。

⑮ 「雖」〔雖曰未學〕(7章)

中世の資料・清家点・道春点・春臺点は「イフトモ」と訓む。後藤点は「イヘトモ」と訓む。一齋点・鈴木点は不明である。

⑯ 「固」〔學則不固〕(8章)

建武本の右訓・清家点の左訓は「アタル」と訓む。中世の資料・清家点・鈴木点を除く近世の資料は「カタシ」



と訓む。鈴木点のみ「コ」と音読みで訓む。

⑰「厚」〔「民徳帰厚矣」(9章)〕

清家点の左訓のみ「ヨシ」と訓む。他のすべての資料は「アツシ」と訓む。

⑱「以」〔「温良恭儉讓以得之」(10章)〕

中世の資料・清家点・道春点は「コレヲモツテ」と訓む。後藤点は「モツテ」と訓む。春臺点・一斎点・鈴木点  
は不明である。

⑲「由」〔「小大由之」(12章)〕

元龜本以外の中世の資料・清家点は「モチキルニ」と訓み、元龜本・道春点以後の近世の資料は「ヨル」と訓む。

⑳「遠」〔「恭近於禮遠恥辱也」(13章)〕

中世の資料・清家点・道春点・春臺点は「サカル」と訓む。後藤点は「トラサカル」と訓む。一斎点・鈴木点  
は不明である。

㉑「事」〔「敏於事而慎於言」(14章)〕

元龜本以外の中世の資料・清家点・道春点・後藤点は「ワザ」と訓む。元龜本は「コト」と訓む。春臺点・一斎  
点・鈴木点は不明である。

㉒「言」〔「敏於事而慎於言」(14章)〕

元龜本以外の中世の資料・清家点・道春点・後藤点は「コト」と訓む。鈴木点は「コトバ」と訓む。春臺点・一

齋点は不明である。

㉓ 「貧」 「未若貧而樂道富而好禮者」(15章)

元応本・建武本・成算堂本は「マトシ」と訓む。後藤点は「マツシ」と訓む。道春点・春臺点・一齋点・鈴木点  
は不明である。

以上が、資料により訓読みが二種以上ある用例である。近世後期以来、最も流行したと言はれる後藤点でも、⑤  
「慍」の「フックム」と言ふ訓は定着せず、「イキドホル」に定着した。このことから、訓の定着に関しては一  
種の資料の訓法からの影響は考へ難いと思ふ。また、⑧「日」の「ヒニ」は清家点の右訓であり、⑨「三」の「ミタ  
ビ」も中世の資料・清家点の訓であり、このことから訓読みは博士家の影響が多いことが言へる。⑮「雖」の「イ  
フトモ」から「イヘドモ」へ、⑯「以」の「コレヲモツテ」から「モツテ」への訓の変遷は周知のことであるやう  
に、もちろん時代による変遷もある。近世の訓点で道春点と春臺点は古い訓みをすることが多い。

c 「音訓み」の用例

① 「用」 「禮之用和爲貴」(12章)

「ヨウ」と付訓のある資料は、建武本・成算堂本の左訓・清家点・後藤点である。元応本・成算堂本の右訓は  
「ユウ」である。

② 「和」〔「禮之用和爲貴」(12章)〕

「クワ」と付訓のある資料は、建武本・成簣堂本・清家点・後藤点である。

以上、音読みの用例である。②「和」字は現在「ワ」と訓むが、おそらく近世を通じて「クワ」と訓むのであらう。

(以下は、次号に続く。)